

## 英語における中間構文の起源について

水野江依子\*

### 1. 序

現代英語には、形態的には能動形でありながら受動的意味を持ちうる一群の動詞がある。これを中間動詞 (middle verbs) と呼び、中間動詞を含む(1)の構文を中間構文 (middle constructions) と呼んでいる。

(1) a. Bureaucrats *bribe* easily.

(この本は簡単に読める)

b. Foreign cars *sell* well.

(外国車はよく売れる)

受動的意味を表す受動文が古英語 (Old English 以下 OE) からすでに存在していたのに対して、中間構文が現れたのは後期中英語 (Late Middle English 以下 LME) になってからである。<sup>1</sup> (2) に近代英語 (Modern English 以下 ModE) から LME 期にかけての中間構文の例を時代を遡って例示する。<sup>2</sup>

(2) a. ModE 期

[1893] I do not *photograph* at all well.

[1892] The meat *cuts* tough.

[1882] Silver *soils* sooner than gold.

[1861] A plate well washed ...*develops* cleaner than one washed insufficiently.

[1812] Claudian throughout would *translate* better than any of the ancients.

[1800] A mixture of these three sub-

stances *fuses* much easier.

[1796] peas will *transplant*, and therefore broken rows maay be made up.

[1731] Thy comedies excel ...And *read* politely well.

[1728] 'Tis solid bodies only *polish* well.

[1706] They'll *eat* much better smothered with onions.

[1669] The Ship will *stear* the better when you sit all quiet.

[1656] There is no Merchandize in this Ware-House which *sels* better, then certain Fans.

[1641] They (sc.pease) *pull* the best when they are the most feltered together.

[1634] The rinde or skin *peeles* off most easily.

[1622] Course and fine pursleene...which *vend* both slowlye and at cheape rates.

[1584] Then, fathers, choose your warres; for better *tels* To Lose like Jews, than winne like infidels.

[1530] I love to weare satten of Bruges, but it wyll *soyle* anone.

b. ME<sup>3</sup>期

[1437] the tonne of such Wynes *solde* better chepe by a gretter quantite than it is nowe.

(Visser (1963-1973: 152-159))

\*〒380-8525 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学  
\*Nagano Prefectural College, 8-49-7 Miwa,  
Nagano 380-8525, Japan.

なぜ中間構文はOE期には存在せず、LME期になってから出現し始めたのだろうか？本論文では、英語の中間動詞の形態を考えることによってこの疑問に対する説明を与えていく。具体的には(3)を提案する。

(3) a. 英語の中間動詞は受動形態素に対応する空の屈折形態素 (null inflectional morpheme:  $\emptyset$ ) を含む。この屈折形態素が駆動要因となり、目的語が主語位置へとA移動する。

b. 空の屈折形態素は経済的な理由で15世紀頃に英語の文法に導入される。その結果、中間構文が出現するようになった。

この提案は、英語の中間構文の起源を解明するだけではなく、中間構文の派生にはA移動が関与しているという立場に対して歴史的な観点から独立した証拠を与える、という別の帰結をももたらすことになる。

本論文の構成は以下のとおり。2節では中間動詞はゼロ接辞が付加された複合的動詞であることを現代英語を観察することによって示す。3節では、ゼロ接辞の起源を探ることによって、中間構文が15世紀に出現した理由を述べる。4節は結語である。

## 2. 中間構文とゼロ接辞

Fujita (1994) や Pesetsky (1995) は、英語の中間動詞はゼロ接辞が付加された複合的動詞であると論じている。本節では形態論的および統語論的観点からその妥当性を支持する議論を行う。

### 2.1. 形態論からの証拠

まず初めに、中間動詞には(4)で示したように、ゼロ接辞 $\emptyset$ が含まれていることを、形態論的観点から論じよう。

(4) Bureaucrats bribe- $\emptyset$  easily.

Myers (1984) は、ゼロ形態素を含む語はさらな

る派生接辞の付加はできない、という(5)の一般化を提案している。

(5) Myers's Generalization

Zero derived words do not permit the affixation of further derivational morphemes.

*support* を例にとってみよう。これは動詞としても名詞としても利用可能である。しかし、(6)で示したように、動詞から形容詞を派生させることは可能であるが、名詞からの派生は(7)で示したように不可能である。<sup>4</sup>

(6) supportive

(7) a. \*supportial

b. \*supportious

Myers は、*support* のように二つの範疇をもつ語は、一方が他方にゼロ接辞を付加することによって派生されると考えている。すなわち、(8)で示したように、名詞 *support* は動詞 *support* にゼロ接辞が付加したものである。

(8) [[support  $v$ ] - $\emptyset$   $N$ ]

従って(10)で示したように、ゼロ接辞が付加している名詞 *support* にさらなる接尾辞を付加することは Myers の一般化に反することになり排除される。

(9) [[support  $v$ ] -ive  $A$ ]

(10) a. \*[[[support  $v$ ] - $\emptyset$   $N$ ] -ial  $A$ ]

b. \*[[[support  $v$ ] - $\emptyset$   $N$ ] -ious  $A$ ]

中間動詞について見てみよう。(11)で示したように中間動詞は名詞化することができない。

(11) a. \*the bureaucrats' easy bribery

b. \*the book's easy translation

(Pesetsky (1995: 261))

中間動詞がゼロ接辞の付加したものであるとすると、Myers の一般化によって、さらなる派生接辞を付加することは排除される。

(12) a. \*[[[bribe  $v$ ] - $\emptyset$   $v$ ] -ry  $N$ ]

b. \*[[[translate  $v$ ] - $\emptyset$   $v$ ] -tion  $N$ ]

以上の点から、中間動詞にはゼロ接辞が付加されているという主張は妥当であるように思われる。

## 2.2. 統語論からの証拠

### 2.2.1. 他動詞としての中間動詞

#### 2.2.1.1. Keyser and Roeper (1984)

意味的には動詞の目的語であるはずの名詞句が中間構文の主語として表れていることから、その派生にはA移動が関与しているという立場がある。具体的には、(13)の中間構文は(14)で示したように、目的語が頭在的に主語位置へ移動することによって派生されるというものだ。

(13) This wall paints easily.

(14) [<sub>DP</sub> ] paints [<sub>DP</sub> this wall] easily.

↑

Keyser and Roeper (1984) は中間動詞が他動詞であるということを示した上で、中間構文の表層上の主語が本来は動詞の目的語であり、(14)のような統語的派生を経ていると論じている。

彼らの論拠を順に見ていこう。第一に、(15)で示したように接頭辞 *out-* は自動詞と結合し他動詞をつくることができるが、(16)で示したように中間動詞には結合することができない。

(15) John outran Bill.

(16) a. \*Trees outplant flowers easily.

b. \*Bureaucrats outbribe managers easily.

(Keyser and Roeper (1984: 393))

これは中間動詞が他動詞であることを示している。

第二に、(17)で示したように *away* は自動詞と共起して連続的な意味(「〜し続ける」)を表す構文をつくるが、(18)で示したように中間動詞とは共起することができない。

(17) a. The dial is spinning away.

b. John is hitting away at Bill.

(Fagan (1988))

(18) a. \*The bureaucrats<sub>i</sub> bribe *t<sub>i</sub>* away easily.

b. \*The chickens<sub>i</sub> kill *t<sub>i</sub>* away easily.

c. \*The room<sub>i</sub> paints *t<sub>i</sub>* away easily.

(Keyser and Roeper (1984: 392))

これは、中間動詞が他動詞の性質を持つためである。

第三に、中間動詞は表層の主語と結びついて複合語を形成することができる。

(19) a. bureaucrat-bribing

b. chicken-painting

c. wall-painting (ibid.)

Roeper and Siegel (1978) は、(20)で示したように動詞由来複合語は動詞句において動詞の直後に生じている構成素だけが編入の対象になると主張している。<sup>5</sup>

(20) a. Teachers make boat fast.

b. boat-making

c. \*teacher-making

d. \*fast-making

(20)において動詞の第一姉妹である直接目的語 *boat* は動詞と複合語となれるが、第一姉妹ではない主語や副詞はなれない。(19)が可能であるということは、中間構文の表層上の主語が元々は直接目的語の位置にあるということを意味している。

#### 2.2.1.2. Fagan (1988) の反論と問題点

Fagan (1988) は、Keyser and Roeper (1984) の議論は中間動詞が他動詞であることを示すのに十分なものではないと反論している。

例えば、接頭辞 *out-* は自動詞であってもそれが状態動詞でなければ付与できないという(21)の事実を挙げている。

(21) a. \*John outbelieves everyone.

b. \*His advice outmattered ours.

(Fagan (1988: 191))

すなわち、(16)が非文なのは、中間動詞が他動詞であるからというわけではなく、状態動詞であるからということになる。

さらに, *away* は自動詞であってもそれが状態動詞であれば共起できない(22)の事実を挙げ, (18)が非文なのは中間動詞が状態動詞であるから, と主張している。

(22) a. \*He stank away.

b. \*She belonged away. (ibid.: 190)

実際, 中間動詞は状態動詞であるということはこれまでに論じられている。例えば, 状態動詞は(23)で示したように, 進行形や命令形になることができないが, 中間動詞も(24)で示したように, 進行形や命令形をとることができない。

(23) a. \*John is knowing the answer.

b. \*Know the answer, John!

(Keyser and Roeper (1984: 385))

(24) a. \*Bureaucrats are bribing easily.

b. \*Bribe easily, bureaucrats! (ibid.)

以上の点から, Keyser and Roeper (1984) の議論は, 中間構文が目的語の A 移動によって派生されることを支持するものではないと Fagan は結論づけた。しかし, Fagan (1988) の反論には十分でない点もある。それは動詞複合語の議論である。彼女は Keyser and Roeper (1984) が問題にした(25)に対し, 複合語の第一要素になれるのは名詞か形容詞に限られており, 副詞が第一要素にきている(25)はそもそも複合語ではない, と述べている。

(25) a. \*easily-bribing bureaucrats

b. \*easily-painting wall

c. \*easily-killing chicken (ibid.: 392)

しかしながら, (19)が可能であるという言語事実に対しては何も述べておらず, (19)の事実は依然として中間動詞が他動詞であることを示す強い証拠となっている。

## 2.2. 移動の駆動要因としてのゼロ接辞

中間動詞が他動詞であり, 目的語が顕在的に主語位置へ移動したと仮定すると, 問題として残る

のはその移動の駆動要因である。移動には必ず何らかの要因が必要であるが (cf. Chomsky (1993)), Keyser and Roeper (1984) は中間構文において直接目的語がなぜ主語位置に移動するのかについては論じていない。

同様の派生をする受動文においては, 受動形態素がその一つの要因となっていることはよく知られている (cf. Baker, Johnson and Roberts (1989))。本論では, 中間動詞を形成するゼロ形態素は, 格照合に関して受動形態素-en と同様の素性を持つと仮定し, 中間構文における目的語移動の駆動要因はこのゼロ形態素であると主張する。便宜上, Fujita (1994) の用語を用い, その素性を [+EN] と表す。[+EN] はその語彙特性として動詞の目的格照合の働きを不活性にする。<sup>6</sup> 従って, 格が正しく照合されるために目的語は主語位置へと移動するのである。

(26) a. passive constructions

[ ] were brib-ed<sub>[+EN]</sub> [the bureaucrats].  
↑

b. middle constructions

[ ] bribe-Ø<sub>[+EN]</sub> [bureaucrats]easily.  
↑

ここでの提案は(27)で示した Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH) の観点からも支持されると思われる。

(27)UTAH

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure.

(Baker (1988: 46))

UTAH は普遍文法において重要な役割を果たしている。なぜならば UTAH を仮定することで言語習得の早さを説明できるからだ。つまり, 構造と意味の対応が規則的であればあるほど, 子供が学習することが少なくなるのだ。従って,

UTAH を満たしているという点からも、中間構文の表層上の主語は受動文と同様、顕在的に派生されると主張することは適切であろう。<sup>7</sup>

### 3. 通時的分析

2 節では中間動詞にはゼロ接辞が付加しているということを論じた。本節では、このゼロ接辞が中間構文の出現に大きく関与しているということを論じていく。

#### 3.1. 中間態と再帰代名詞

本論文では意味的観点から中間動詞の起源を(28)で示した古典ギリシア語などに見られる中間態 (middle voice) に由来するものであると考える。

(28) a. *louo-mai tas cheiras*

'I wash my hands.'

b. *hallo-mai* 'I leap.'

c. *boulo-mai* 'I wish.'

(Kemmer (1993: 1))

中間態によって表される意味は様々ではあるが、動作や状態が直接的にせよ間接的にせよ、その動詞の主語や主語の関心に影響を与えているという共通点が見られる。言い換えると、中間態によって主語に関する再帰的な解釈がなされる。

Ferraresi (1996) によると、ドイツ語では中間態が担っていた再帰的解釈は再帰代名詞 *sich* によって取って代わられた。

(29) a. *Er zieht sich an.*

'He is getting dressed.'

b. *Er fürchtet sich.*

'He is afraid.'

フランス語も同様に中間態の役目を再帰代名詞 *se* が担っている。

(30) *se laver* 'wash'

中間態という言語形式を持たないドイツ語やフランス語のような言語においては中間態の担ってい

た意味を伝えるために、他の言語形式である再帰代名詞が利用されているということだ。

ドイツ語とフランス語において、この再帰代名詞が中間構文に必要であるという点に着目したい。

(31) ドイツ語

*Das Buch liest sich leicht.*

The book read REF easily

'The book reads easily.'

(Yamada (1997: 99))

(32) フランス語

*Ce livre se lit facilement.*

This book REF read easily

'This book reads easily.' (ibid.: 100)

これは、特に不思議なことではない。というのも、(31)(32)の文は、本がよく売れるという状態を表しているが、これはセールスマンの腕や興味をそられる広告によってそういう状態になっているわけではなく、その本の内容自身が素晴らしいためによく売れるわけであり、中間構文は主語に関しての再帰的な意味合いを残している。

両言語における中間構文の再帰代名詞は「中間態」の意味を担う再帰代名詞から意味の拡張によってもたらされたものであると言えるだろう。

### 3.2 英語における中間動詞の発達

#### 3.2.1. 再帰動詞と再帰代名詞

英語も再帰的解釈を受ける場合、ドイツ語やフランス語と同様、(再帰)代名詞が中間態のような役割を果たしていた。(33)はOE期の例、(34)はEME期の例である。

(33) *Heo ... wolde ... hi sylfe baTian.*

She would her self bath

'She would wash herself.'

(34) a. That she *her self* not ouerslept.

that she her self not overslept

'She did not oversleep.'

(Sir Gener. (roxb.) 2646 [c1430] /ibid.)

- b. To Grislide again wol *me* dresse.  
 To Grislide again will me go  
 'I will go to Grislide again.'

(Chaucer, *Clerk's Tale*. 951 [c1386] /ibid.)

ところがME期以降、再帰動詞と呼ばれる類の動詞 (wash, shave, bath, dress など) において、再帰的に解釈される場合は再帰代名詞を使うことが避けられるようになった。すなわち、*I wash myself* よりも *I wash* という表現が好まれるようになっていった。ME期に見られる再帰動詞の例は(35)であるが、いずれも再帰代名詞は用いられていない。

- (35) a. They that *bathen* temperately in hote  
 they that bathed temperately in hot  
 water  
 water  
 'They bathed temperately in hot  
 water.'

(Trevisa, *Barth* [1398] /ibid.)

- b. Meue thy body leest that thou  
*overslepe*. (ibid.)  
 c. Te douthe *dressed* to Te wod.  
 the company went to the woods  
 'The company went to the woods.'

(Gaw and Gr, *Knt* [1415] /ibid.)

### 3.2.2. 経済性

なぜこのような変化が起こったのであろうか。類似した変化がロシア語において見られるという点に着目したい。ロシア語において再帰動詞の再帰代名詞は、歴史上、縮小された再帰的動詞接辞 *-sj* によって代用されるようになった。(36a)は非再帰動詞であり、主語に関して再帰的解釈をさせる場合、再帰代名詞 *debja* が用いられている。一方(36b)の再帰動詞では再帰的動詞接辞 *sj* によって再帰的解釈が行われている。

- (36) a. Viktor nenavidit *debja*.

Victor hates himself

- b. Ja kazdyj den' mojusj  
 I every day wash+(my)self

(Haiman (1983: 804))

これは経済性の観点から妥当な歴史的变化であると言えよう。なぜなら、再帰動詞はその特性として動詞自身が自分自身に対して行う動作について言及しているものであるため、その再帰性というのは予測可能である。さらに完全な再帰代名詞を補うというのは、余剰的であり経済的でない。(36b)では、動詞接辞だけで十分にその再帰性を担える。本論文ではHaiman (1983) に従い、この変化を経済的な動機付けに起因させる。Haiman (1983: 804-805) ではハンガリー語、トルコ語においても再帰動詞のように再帰的解釈が予測可能な場合は縮約動詞接辞が付加されるだけであると観察している。

(37) ハンガリー語

- a. Viktor utália *mag-á-t*.  
 Victor hates self-his-ACC  
 b. Borotvál- *koz-off-Ø*  
 Shave self-PAST-3sg

(38) トルコ語

- a. *Kendi-ni* seviyor  
 Self-his he loves  
 b. *Yika-n-di-Ø*

Wash-self-PAST-3sg (ibid.: 806)

(39)の表は動詞からその再帰性が予測されない場合とされる場合に用いられる形態をまとめたものである。

(39)

	Unpredicted	Predicted
ロシア語	sebjā	+sja
ハンガリー語	mag	+kod+
トルコ語	kendi	+in+

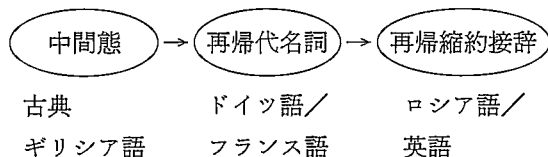
本論では、英語における(34)から(35)への変化は、ロシア語に見られる変化と同様の経済的な動機付けによるものであり、英語においては縮約形態素としてゼロ形態素 $\emptyset$ がその役割を担うようになったと提案する。

(40)

	Unpredicted	Predicted
英語	PRO+self	+ $\emptyset$

(ibid.: 803)

(41) 再帰的解釈を担う要素の変遷 (概略)



### 3.2.3. 再帰代名詞の消失と中間構文の出現

3.1節でドイツ語やフランス語の再帰代名詞が中間構文に用いられていると論じたことを思い出してほしい。本論ではドイツ語やフランス語の再帰代名詞が中間構文に用いられるようになったと同様に、再帰縮約接辞としてのゼロ形態素が英語において用いられるようになり、中間構文が出現したのだと提案する。

(42) 英語における中間動詞のゼロ形態素の起源は、再帰的意味をあらわす再帰縮約接辞である。

再帰代名詞から縮約された再帰縮約形態素が中間構文に用いられるようになったというのは英語に

限られたものではない。アイスランド語やノルウェー語においても、再帰代名詞-*sik*が歴史的に再帰縮約代名詞-*st*や-*s*に縮約されたが、(43)で示したように、同じ縮約代名詞が中間動詞を形成している。

(43) a. Dyrnar opna<sup>st</sup>. (アイスランド語)  
 'The door opens.'

(Kissock (1997: 6))

b. Boka loses. (ノルウェー語)  
 'The book is read.'

(Áfarli (1992: 17))

(42)が正しいとすると、英語における中間構文の出現がLME期になってからという事実が、自然の帰結として説明できる。

(44)はVisserに挙げられた再帰動詞のうち、再帰代名詞を伴わないものの数をまとめた表である。再帰動詞において再帰代名詞が用いられなくなった時期は、14世紀から急激に増えているということが分かる。

(44) 再帰代名詞を用いない再帰動詞の数の変遷

年代	12c	13c	14c	15c
数	2	7	23	12

また、個別の単語に関して、ヘルシンキコーパスを用いて調べた結果を(45)の表としてまとめた。これは再帰動詞 *dress* において、主語と目的語が同一人物を示す場合に、目的語に再帰代名詞を用いている場合と用いない場合の数を示したものである。

(45)

年代	S+dress+O (S=O)	S+dress
1150-1250	0	0
1250-1350	0	0
1350-1420	2 (100%)	0 (0%)
1420-1500	3 (60%)	2 (40%)
1500-1570	1 (50%)	1 (50%)
1570-1640	1 (20%)	4 (80%)
1640-1710	0 (0%)	1 (100%)
1710-1780	0 (0%)	2 (100%)

(45)の表からも、再帰動詞において再帰代名詞が用いられなくなり始めた時期は15世紀頃であるということが分かる。

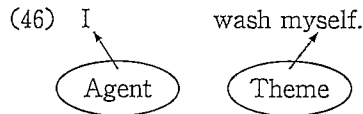
言い換えると、14世紀から15世紀になって再帰縮約接辞であるゼロ形態素が導入されたことになり、これは中間構文が出現し始めた時期と一致する。

以上をまとめると、中間構文が15世紀になって出現し始めたのは、中間構文を形成するゼロ接辞が14世紀から15世紀にかけて出現し始めたからであると言えよう。

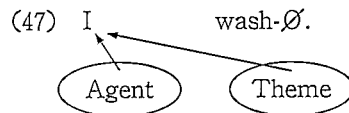
### 3.3. 再分析

説明すべき問題が二点ある。第一に、15世紀に導入されたゼロ接辞が、受動形態素と同様目的語を主語位置へ移動させるようになったのは何故か、という問題だ。これには再分析が関与していると提案する。再び、再帰動詞の歴史的变化を考察してみよう。(46)で示したように、再帰動詞が再帰代名詞を必要としていた頃はその動作主役 (Agent role) と主題役 (Theme role) は、それ

ぞれ独立した項が担っていた。



14世紀以降、(47)で示したように、ゼロ形態素が再帰代名詞の代わりに導入されるようになると、主語が動作主役と主題役の両方を担うことになる。



つまり、主語が主題役となっているという解釈が可能となり、従来の受動文からの類推により、目的語が主語位置へ移動したものであるという再分析を受けることになる。さらに、受動形態素との平行性からゼロ形態素が目的語の移動を駆動するという再分析をもたらす。再帰動詞の主語は一般的に有性 (animate) のものであったが、ひとたび空の形態素が受動形態素と同様の働きをもつものと再分析されると、無性 (inanimate) の項へと拡大し、中間構文の出現へと貢献することになったのだ。

### 3.4. 接辞の消失と空の形態素

第二の考察すべき点は、英語の中間構文においてのみ空の形態素が導入されたという点だ。他の言語では縮小されたとはいえ、(43)のアイスランド語の *-st* のように、中間構文を形成する形態素には何らかの顕在的な形は残っている。なぜ、英語ではゼロの中間形態素が可能であったのだろうか。

英語のゼロ形態素はかなり英語特有の性質であり、中英語期に起こった屈折接辞の水平化と大きく関わっていると考えられる。よく知られているように、古英語では動詞形態素が非常に豊かであった。たとえば古英語の直接法では、全ての人称で別々の屈折接辞を持っていた。ところが、(48)に示したように、このような豊かな屈折接辞は中



英語期に水平化され、1人称単数現在、2人称単数現在、複数現在は全て顕在的に表されない。

(48)

	OE	ME
Present singular 1	-e	∅
2	-(e)st	
3	-et	-s
Plural 1, 2, 3	-at	∅

これは、動詞接辞が失われて「無」になったのではなく、顕在的 (overt) な動詞接辞が隠在的 (covert) 動詞接辞に置き換わったのだと考えられる。というのは顕在的に見えなくとも我々はそれが過去形ではなく、1人称の現在形であるということが理解できるからだ。これは現代英語における *plays* の接辞 *-s* が3人称単数現在であると理解できるのと同じであると考えても問題ないであろう。

中英語期における屈折接辞の水平化は古英語期に顕在的な動詞接辞が占めていた位置に、中英語期以降は空の動詞接辞が代わって占めるようになったという変化ととらえることができる。他のゲルマン諸語は英語よりも豊かな屈折接辞を持っているため、空の接辞の導入ということがなされず、顕在的縮約接辞にとどまったのに対し、英語はこのような背景を持つことから、比較的容易に空の接辞の導入が許されたと提案する。興味深いことにこのような動詞の屈折形態素の水平化が起こったのは14世紀ごろであり、この頃からゼロ形態素を許す素地が英語にはでき始めていたといえよう。

#### 4. 結語

本論文では、英語の中間構文がなぜ LME 期になって生じたのかについて考察を行った。具体的には以下のことを提案した。中間動詞はゼロ接辞

が含まれた複合的動詞である。このゼロ接辞は再帰的縮約接辞の一形態であり、再帰動詞における再帰代名詞の変わりに14, 15世紀に用いられるようになった。そこから再分析が起こり、現代英語に見られる中間構文が生じるようになった。ゼロ接辞が可能になった背景には英語の屈折形態素の水平化が関与していることも論じられた。

#### 注

\* 本論は近代英語協会第15回大会 (1998年5月22日、於：京都外国語大学) で口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。

<sup>1</sup> 時代区分は以下のとおりである。

古英語期(OE)	700年-1100年
中英語期(ME)	
前期中英語期(EME)	1100年-1300年
後期中英語期(LME)	1300年-1500年
近代英語期(ModE)	1500年-1900年
現代英語期(Present-Day E)	1900年-

<sup>2</sup> [ ] 内の数字は年代である。

<sup>3</sup> Visser (1963-1973) の観察では副詞を伴う中間構文の例は(2b)のみである。

<sup>4</sup> 接尾辞 *-ive* は動詞に付加することによって形容詞を作り、*-ial*、*-ious* は名詞に付加することで形容詞を作る。

<sup>5</sup> 第一姉妹の原理として知られている。

<sup>6</sup> ミニマリスト理論 (Chomsky(1993)) 以前では目的格が吸収されると分析されている。いずれにせよ、目的格の付与あるいは照合がなされない、という点では共通である。

<sup>7</sup> D構造を廃止したミニマリスト理論の元での UTAH の役割については、Baker (1997) を参照のこと。

#### 参考文献

- Åfarli, Tor A. (1992) *The Syntax of Norwegian Passive Constructions*, John Benjamins, Amsterdam.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation*, Chicago Press, Chicago.
- Baker, Mark (1997) "Thematic Roles and Syntac-

- tic Structure," *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 73-137, Kluwer, Dordrecht.
- Baker, Mark, Kyle Johnson and Ian Roberts (1989) "Passive Arguments Raised," *Linguistic Inquiry* 20, 219-251.
- Chomsky Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Fagan, Sarah M.B. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fagan, Sarah M.B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Ferraresi, Gisella (1996) "Middles, Reflexives and Ergatives in Gothic," *Language Change and Generative Grammar*, ed. by Ellen Brandner and Gisella Ferraresi, 273-291, Westdeutscher Verlag, Opladen.
- Fujita, Koji (1994) "Economy of Derivation and the English Middle," *Minimalist Approaches to Syntax and Morphology*, ed. by S. Park, Y. Kim, M. Kang and H. Han, 169-195, Hankuk Publishing Co.
- Haiman, John (1983) "Iconic and Economic Motivation," *Language* 59, 781-819.
- Hoekstra, Teun and Ian Roberts (1993) "Middle Constructions in Dutch and English," *Knowledge and Language vol. III, Lexical and Conceptual Structure*, ed. by E. Reuland and W. Abraham, 183-220.
- Kemenade, Ans Van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice*, John Benjamins, Amsterdam.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Kissock, Madelyn (1997) "Middle Verbs in Icelandic," *American Journal of Germanic Linguistics and Literatures* 9, 1-22.
- Myers, S. (1984) "Zero-Derivation and Inflection," *MIT Working Papers in Linguistics 7: Papers from the January 1984 MIT Workshop in Morphology*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Nakao, Toshio and Osamu Koma (1990) 「歴史的に探る現代の英文法」大修館, 東京.
- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Roberts, Ian G. (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris, Dordrecht.
- Roeper, T. and M. Siegel (1978) "A Lexical Transformation for Verbal Compounds," *Linguistic Inquiry* 9, 199-260.
- Sobin, N. J. (1985) "Case Assignment in Ukrainian Morphological Passive Constructions," *Linguistic Inquiry* 16, 649-662.
- Stroik, Thomas (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
- Stump, Gregory T. (1998) "Inflection," *The Handbook of Morphology*, ed. by Andrew Spencer and Arnold M. Zwicky, 13-43, Blackwell, Oxford.
- Visser, F. Th. (1963-73) *An Historical Syntax of the English Language*, 3 parts; 4 vols. E. J. Brill, Leiden.
- Yamada, Hiroshi (1997) 「中間構文について：フランス語を中心に」【ヴォイスに関する比較言語学的研究】99-131, 三修社, 東京.